

323

299

小樽の古代文字



始



文學士 中目 覺 著

小樽の古代文字

地理歴史學會 刊行

323-299



文學士 中目 覺 著

小樽の古代文字

地理歴史學會 刊行

大正
8. 5. 5
内交

緒言

小樽手宮の海岸に一つの洞窟があり、そこに一種の古代文字が彫刻してある。之に
關して私が雑誌に載せた小論文が三篇ある。今之を本書に收めた。之に
右の論文に參考した圖書を茲に舉げて置く。

日本書紀

土佐日記

日本帝國海上權力史講義

渤海史考

樺太の話

オロッコ文典

史學雜誌

歴史地理

大阪毎日新聞

小笠原長生著

鳥山喜一著

中目覺著

中目覺著

緒言

大唐西域記

舊唐書

唐書

Ahn-Dallos : Ungarische Sprachlehre.

Batchelor, J : Ainu-Englisch-Japanese Dictionary and Grammar.

Geographical Journal. 1904, 1914.

Götz, W. : Verkehrswege im Dienste des Welthandels.

Grube, W. : Goldisch-deutsches Wörterverzeichnis.

Harlez, C. de : Manuel de la Langue Mandchoue.

Hassert, K. : Allgemeine Verkehrsgeographie.

Herodotos : Geschichten. Uebersetzt von F. Lange.

Huntington, E. : Civilization and Climate.

Könnye : Magyar-Német és Német-Magyar Zsebszótár.

Radloff, W. : Die alttürkischen Inschriften der Mongolei.

Radloff, W. : Atlas der Altertümer der Mongolei.

Ratzel, F. : Politische Geographie.

Ratzel, F. : Anthropogeographie.

Strabon : Géographie. Traduction par A. Tardieu.

Thomsen, : L'Inscription de l'Orkhon déchiffrée.

Vogel, W. : Nordische Seefahrten im früheren Mittelalter.

Wied, K. : Leichtfaszliche Anleitung zur Erlernung der türkischen Sprache.

大正八年三月三日

廣島に於て

著者識

小樽の古代文字

目次

- 一、中亞の氣候變動と我國への影響……………一頁
- 二、鞑韃語墓誌について……………二
- 三、我國に保存せられたる古代土耳其文字……………元

小樽の古代文字

文學士 中目 覺 著



一、中亞の氣候變動と我國への影響

茲に中亞即ち中央亞細亞といふのは、西はカスピ海から東は興安嶺の邊までを指すのである。此地方は緯度の關係上、雨量が少く、沙漠でなければ草野で、其間に此處彼處に沃地が散在して居るといふ所である。人口は概して稀薄で文明の程度も低いが、昔から屢々史的活動の發源地となつて、其影響の及んだ所が中々廣いのである。而して此所に起る史的活動の原因が氣候變動と關係ある様に思はれる。又中には其活動が我國まで反響したものがあつた様に思はれる。之について愚見を述べて見たい。

十九世紀に至りて氷河の研究が始まり、又過去に於ける氷河の存在なども確められる様

一、中亞の氣候變動と我國への影響

になつてから、氣候に週期的變動があると云ふことが、學者の頭の一部を占める様になつた、而して新疆省などを旅行した人は、昔の都會や建築物が沙漠の中に残つて居るのを見て、昔し水が相當にあつて、人類の棲息に適した所も、段々と乾燥する爲めに廢墟となつてしまつたのだといふ結論に達し、地球乾燥説なるものを唱へる様になつた。この乾燥説によると、地球は段々と乾燥して行くといふのであるが、學者によつて説が三種程に分れて居る。之に就てはグリゴリ博士が、英國地理學雜誌一九一四年二月三月號に一論文を草して精しく論じて居る。博士は世界の各地から此問題に關する材料を集め、而して結論として、歴史時代になつてからは、地球全體としては雨量に増減がないが、一地方について見ると乾濕の變動がある。而して中央亞細亞などは段々乾燥して來る方であると言つて居る。しかし米國のハンチングトン博士などは、「中央亞細亞の氣候は、漸次乾燥に向ふが、其間に脈動をなして居る。故に過去に於て乾期と濕期とが交る／＼現はれた、そして之がカスピ海の水面などにも影響を及ぼした」と説いて居る。この最後の説の如く考へるのが

最も妥當と信する。

歐洲では西羅馬帝國の滅亡前後に當りて民族の大遷徙が行はれた。史家は其原因について、亞細亞の民族が西進した爲めに、他種族を順に西へ／＼と追ひやつた結果であると説いて居る。亞細亞の民族が何故西へ動いたか。之に就いては中央亞細亞の氣候問題を研究した露西亞のクロボトキン公などは一九〇四年の英國地理學雜誌に於て斯う論じて居る。中央亞細亞に於ては雨量が減じ、年々農作物の收穫も減ずるから、農民は遊牧民に變じ、遂に到底彼等の國に住むことが出來ぬ様になつて、歐洲へ侵入した。之れが原因となつて羅馬帝國が遂に亡びたのである。之がクロボトキン公の説く處である。此の如き事實もあつたらうと思ふが、中には農民から遊牧民となり、それから侵掠に出たと説かんでもよい場合があると思ふ。草野は限りある人口を容るゝに過ぎないから、人口が増すとか、天變地異の爲めに食物に不足するとか、牧草が缺乏する時は、農民も遊牧民も他に移住せねばならぬ。そこで週期的に他國に侵入する様になる。是等の遷徙は悉くとは言はぬが、氣候

變動に基くものが多いと考へて宜しからうと思ふ。

西方に向つて中央亞細亞の民族が侵入したのは、紀元後に限らぬ様である。ヘロドトス（紀元前四八四—四二八）の「歴史」には次の様な記事がある。

テウリ人はスキチア人と風俗を同うして居る。彼等はダリウス王の遠征より一代ばかり前に、國を離れなければならぬ禍に遇うた。即ち彼等の國に澤山の蛇があらはれ、又沙漠の方からも蛇が澤山出て來たから、人々何れも恐れて國を立ち退いたのである。（第四編一〇五）

之などは、氣候變動に基く飢饉などの爲めに、移住を餘儀なくされたのであらうが、眞の理由を言はないで蛇云々としたのではあるまいか。

次にストラボ（紀元前六二年生）の「地理誌」に次の様な記事がある。

實に是等の種族の領地たるヒルガニア、バルチアの中には、全く水氣のない廣大の沙漠がある。しかし水草を追ふスキチア人は、此障害物を譯もなく突き抜けて、氣の向き

次第に或時はヒルガニアやチセアへ押寄せ、或時はバルチアの平野へ押寄せた。而して此所の住民から貢を取つた。貢というても、時を定めて押寄せて來て、自分等の好きな物を掠奪して行くのである。が是等の種族は條約などは守らないから、條約以上に度々押寄せて來る。結局戦争になるとまた條約を結ぶ。此條約がまた戦争の原因となる。此の如き生活法は遊牧民の常である。絶えず附近を荒し廻るが、直ぐ條約を結ぶ。

サキ人（スキチア人の一族）の侵入は、附近の國に向ふこともあるが、遠方の土地へ移住することもある。（第十一編第八章三四）

此にある遠方の土地へ移住するといふのは、平時に於ける附近の定住民掠奪と違つて、重大な原因の爲めに大規模の遷徙を行ふ場合と解釋せられる。此様に餘程昔から時々遷徙が行はれて居た。其原因の重なるものを私は氣候の變動に歸したのである。

ヘロドトスやストラボの記事には遷徙の事實だけを擧げて其眞因を述べて居らぬが、中央亞細亞が乾燥して沙漠が廣くなる爲めに、沙漠の中に廢墟が残つて居るといふ事實は、

随分古くから記録に残つて居る。

玄奘が和闐地方を旅行した時に、既に砂で埋まつた町があつた。現代人ならば、之を地球乾燥説とか氣候帯移動説とかで解釋する處を、當時の人は説話を作りて之を説明し、満足して居つたのである。「大唐西域記」の第十二卷の終りの方に、曷勞落迦城が佛様の罰で砂に埋もれた話があり、此處へ來て其寶物を發掘せんとすると、猛風暴發、煙雲四合、道路迷失するといふことが書いてある。都邏(京都文科大學出版本に據る)の故國に至れば、國久しく空曠、城皆荒蕪して居ることを記し、折摩駄那の故國に至れば、城郭歸然たれども、人煙斷絶して居ることを記してある。元は水もあつて人の居住に適した所だが、段々乾燥して沙漠となり、人影を見ざるに至つたのである。之が第七世紀前半の記事である。

偕て草野地方に起る原因の爲めに、其所の住民が他に移住するといふ事實があるとするれば、西とか西南とかに限らず、東の方へも向ふべき譯である。南は西藏やパミルの高原で移住が出來ず、北は不毛の西伯利で、之亦問題にならぬが、東には遷徙を妨ぐる何等の理

由がない。此方面は果してどうか。

ハンチングトン博士は「文明と氣候」の中に、中央亞細亞に於ける乾濕の變遷を研究して之を曲線で示し、尙ほ説明もして居る。之によれば、紀元後に於て最も著しい乾燥の時期は、西紀六五〇年と一二五〇年とを中央とする時代である。即ち其前後數十年間は中央亞細亞が大に乾燥し、其絶頂が六五〇年と一二五〇年に當るといふ意味である。私は他の乾燥期についてはまだ調べて見ないが、此二期には中央亞細亞の活動が東方に向つても大に影響があり、我日本までも反響があつたと思ふのである。

六五〇年を中央とする時代は、支那では隋から唐の初に當る。此時代には絶えず突厥との交渉がある。支那では随分古くから北方民族の爲めに苦しめられて居るが、此時代以前は北人の禍が比較的少かつた様である。此時代に至つて突厥が絶えず支那に壓迫を加へ、且つ十萬人内外の人間が、支那領内に移住したことなどもあるのを考へて見ると、本國に多數の住民が居るに困難な事情が生じたのではあるまいか。東亞に於ては支那が文明の中

心であるから、支那に向ふ運動が尤も盛であり、又記録にも残つて居るが、之と同様に満洲方面にも運動が向ひ、夫れが又今日の沿海州方面までも及んだらうと想像せられるのである。西洋に於ける民族遷徙の状態から考へて見ると、之が大に可能であると思ふ。唯だ満洲や日本海方面は、中心を離れた僻地である爲めに、左程重要視せられず、随つて記録にも全く載らなかつたことと思はれる。しかし突厥人は本國に居ることが困難になつたので第七世紀の初に至りて、四方に發展したのであらう。舊唐書列傳第一百四十四上の突厥の傳に次の如き記事がある。

：始畢可汗咄吉者啓民可汗子也隋大業中嗣位值天下大亂中國人奔之者衆其族強盛東自契丹室韋西盡吐谷渾高昌諸國皆臣屬焉：

之と同様の記事が唐書二百十五上にもある。之によりて見ると、契丹室韋が突厥に臣屬したといふから、之と境を接して居る靺鞨が突厥の文明に接觸したことが容易に想像せられる。支那の都に於ても突厥靺鞨兩民族の接觸があつたらうし、又満洲に於ても兩者の交

渉が多かつたことと思ふ。斯うして靺鞨人は彼等の言語を寫すに都合のよい、しかも漢字に比して簡単な突厥文字を學んだものと思ふ。此突厥文字を習得した靺鞨人が、西方からの壓迫によりて、或者は遂に海を渡りて日本に來り、齋明天皇の朝に比羅夫の厄介になつたと考へられる。斯く考へれば、古代土耳其文字即ち突厥文字を使つて書きあらはした靺鞨語が、小樽に残つて居るといふことも説明が出来ると思ふ。

この突厥文字が我國へ傳はつた通路、即ち蒙古西部から北満洲を過ぎて、圖們江口附近で日本海に出る線は、天然の大通路で、小白山脈中の一部の森林を除いては凡て草野で、通過には何等の障害物が無い。また西の方、蒙古からツラン地方へは交通が始終行はれて居る。即ち今日の露領中央亞細亞から蒙古北満洲を経て圖們江口附近で日本海に出る道が亞細亞に於ける天然大通路の一である。此通路は有史前にも相當に利用されたらうと思ふが、之は學術研究の進むに従つて段々明になると思ふ。

室韋などが突厥に臣屬したのは隋の大業中とあるから、西紀六〇五年から六一六年まで

の間に起つた事である。之から齋明天皇の六年即ち西紀六六〇年までは五十年もある。此間に突厥文字も傳はり、其變形も出來ると考へて少しも差支がない様に思はれる。我國では維新前に少數の蘭學者があつたが、西洋文字の傳はつたのは維新以後と見てよい。夫から五十年の間に我國人は色々な羅馬字綴を發明した。之を思ふと、我々と殆んど人種を同うする靺鞨人が、五十年の間に文字を採用し、變形文字を工夫したといふことは何も怪しむに足らぬと思ふ。

次に著しい中央亞細亞の乾燥期は一二五〇年を中央とする時代である。丁度元の勃興時代に當る。この時の史的活動が西は遙に歐洲に及び、東は我國の九州まで及んだことは小學兒童も知つて居る事實である。

此の如く歴史に含まれて居る地理的要素は餘程重要なものであるといふことが分る。

大正八年二月「小學研究」所載

二、靺鞨語墓誌について

私は「尙古」第七十一號に於て「我國に保存せられたる古代土耳其文字」の題下に、小樽宮手の洞穴の彫刻は、古代土耳其文字を應用して綴られた靺鞨語であるといふことを紹介した。

この小発見をした時、之に關聯して色々考が浮かんで來たが、單に文字と言語との何たるかを紹介するに止め、何となく物足らぬ様に思ふから、茲に少しく私の考を述べて置かうと思ふ。鳥居龍藏氏の講演筆記によれば、明治十一年に始めて此洞穴を發見した時の中に白骨があつたと云ふから、之は鳥居氏の説く様に墓地であることは疑がない。そこで私は此彫刻を靺鞨語墓誌と名づけた譯である。然らば此墓や其主人公について如何なる歴史が潜んで居るであらうか。

一般學術が尙は幼稚で、器械が不完全であつた古代に於ては、航海術も隨つて極めて幼

稚で、今日の如く大洋を天與の大通路として縦横無盡に航行するといふことは夢にも出来なかつた。しかも此の如き状態は近世の始めまで續いて居つたと言うて宜しい。而して航海は内海に限られたものである。之は歐洲に於ける海運史を調べて見ると能く分る。先づ地中海の如き内海に於て航海が發達したが、ヘルクレスの門即ち今日のジブラルタルの海峡を抜け、自由に大西洋に漕ぎ出でたのは、フェニキア人の二三の例を除けば、中世の終までは極めて稀であつた。それと同様に、北歐に於てもバルチック海とか北海とかいふ様な内海では早く航海が發達したが、大西洋へ出たのは餘程後のことである。然るに喜望峰迂廻の印度航路が開かれると、地中海の航海が俄に衰へ、之が爲めに亡びた國さへある位で、國家社會の進運に激變を與へた。幸に十九世紀に至りてスエズ運河が開通し、地中海が再び大洋航路の一部となつて蘇生したが、之が爲めに航海民ならざる土耳其帝國などは非常な勢で衰へて來た。また今日では殆んどあれどもなきが如きバルチック海も、内海航海時代には交通商業の中心として大に活躍したものである。之はラッツェル博士も説き、

ハッセルト博士も説き、其他交通史を論ずる學者が多く説いて居る所である。同じ現象が東洋にも見られるのである。馬來内海の航海が一時非常に盛んであつた事が想像せられる。又日本海も同様である。此海は四方に陸や島があるから、漂流しても何處かへ着ける。大きな出口は朝鮮海峡と津輕海峡とであるが、之を通る時は何處かに陸影を認めるから、大平洋の只中へ流し出されるといふ心配は殆んどない。そこで大膽に航海が出来る。之が日本海の航海を盛ならしめた理由で、明治の初年頃に汽船の輸入せられるまでは續いて來た現象である。之に反して大平洋岸は航海業が振はなかつた。歐洲でヘルクレスの門を出なかつたと同じ事である。所が汽船と共に大洋航海時代が始まつて、日本海は衰へ裏日本などと言はれる様になつた。此日本海の航海は先史時代から上古に至る頃中々盛んで、沿岸の民族の交通が可なり頻繁であつた様に想像せられるのである。肅慎人なるものが、北海道は勿論のこと、佐渡あたりまで往復して居つたとか、朝鮮と出雲との間に交通が盛であつたとかは、歴史家の説く所である。又幕末の頃までも山丹人などは、樺太の南端邊まで

時々交易に來たものらしい。又樺太と大陸との間の往復も頻繁であつたことは、今日尙ほ存命の年寄の土人などが目撃して居る。又樺太西海岸ナヨロの會長家に、滿文の文書が保存されたなども好い例である。南日本海で日韓間の交通のあつたことは前述の通りであるが、單に朝鮮人だけではなく、他の民族即ちトングース人なども、我國へ往復したではないかと思はれる。ヤマタのオロチは八岐の大蛇と言うて居るが、オロチは日本語で大蛇であるので斯う説明しただけで、實はトングース族でないかと思ふ。現に沿海州の海岸にはオロチ族といふものが居り、また西比利には、オロチヨンとかオロトグとかいふトングースの種族も居る。此等の種族名とオロチとは無關係でない様に思はれる。トングース族の間には鳴咄(樺太の話)の數で地名を作る習慣があり、或は三姓といひ、寧古塔といふが如きそれである。ヤマタのオロチも八族のオロチ人といふ意味ではなからうか。之は尙ほ研究の餘地があると思ふが述べて置く。

次に古代の航海は沿岸航海で、陸の見ゆる處を海岸に平行して進み、夜になると船を岸

に着けて泊つたといふのが普通である。西洋に於けるかゝる航海法の精しい話は、伯林海洋學研究所で年々發行する「海洋學」の一九〇七年號にフォーゲル博士が出して居る。どんな具合かといふと、「土佐日記」の著者が、「浦戸より漕ぎ出で、」から「河尻に船入り立ちて漕ぎのぼる」までの航海法と大同小異と見て宜しいのである。海岸に平行せぬ場合例へば釜山から門司方面に漕ぐ時などは、餘程不安を感じたものであらう。紀貫之の船は目の前に見ゆる處へ渡るにさへ特筆すべき事件の様に「寅卯の時ばかりに、ぬ島といふ所を過ぎてたな川といふ所を渡る。からく急ぎて和泉の灘といふ所に至りぬ」と書いてある。それで漂流の場合は別として、原則としては海岸に沿ひ、渡らねばならぬ所が一番狭い所を渡つたのである。それで日韓の間では釜山から對馬、對馬から博多附近へ來たのである。迎日灣から船出して、我國へ直航したなど、いふのは、絶無ではないにせよ、極めて稀な場合であつたと思ふ。此事は先年慶州旅行談の中に話したことがある。出雲へ行くには、博多から浦傳に或は杵築へ、或は素盞鳴尊の様に簸川口の大江へ着いたものであ

らう。當時大津は海岸であつた。同様に津輕海峡を渡るには、龍飛岬から白神岬へ向うた。それで松前氏も函館といふよい港があるにも係はらず、居城を渡島半島の西南端に定めた譯である。宗谷海峡は宗谷から白主へ、間宮海峡は間宮林藏の渡つた所といふ風に、數千年間動かなかつたのである。

偕て比羅夫の頃の船はどんなものであつたか。大きさは記録にもある様であるが、帆を用ゐたか用ゐなかつたか、まだ調べて見ないが、帆は用ゐたにしても補助機關に過ぎないで、原則としては人の力で櫂を漕ぐものであつたらうと思ふ。それは日本書紀比羅夫の話の條に「齊しく棹して近づき來る」といふ言葉がある。澤山の櫂をそろへて漕いだのであるから、櫂か推進器であつた様に思はれる。尤も之は肅慎人の船の事だが、模倣の原則に依て日本船も同様であつたと思ふ。私の考の様に帆が補助機關に過ぎぬとすれば、沿岸航海をやるより外に仕方がないのである。大陸から佐渡や北海道へ直航することは出来なかつたらうと思ふ。

茲に一つ考へねばならぬとは、故和田雄治博士の調査された日本海の環流と、も一つは風である。日本海の環流は時計の針と逆に廻つて居る。そこで威鏡道方面から、山陰北陸奥羽と海岸傳に航海することは容易であるが、其反對は六かしい。しかし此海流は樺太の西では弱くなるから、黒龍江方面から北海道へ來るには左程困難を見ない。それで北海道へは黒龍江方面の諸民族が來り易く、山陰九州へは浦潮朝鮮方面の者が來り易い。風はどうかといふと、日本海には西に偏した風が多いから、是亦同様の結果を來たす。それで鞆鞆方面から、我國へ來る時と歸る時とは、異なる航路を取つたこともあるだらうと思ふ。今日の汽船の航海なれば、海流や風に構はず最短航路を取るが、帆船であると、今日でも往航路と復航路とが全く違ふといふ場合が多い。例へば英吉利海峡とニューヨークとの間の帆船航路が尤も良い例である。歐洲からの往航は、風を利用して一旦非常に南下し南方からニューヨークに近づく。之に反して復航は汽船航路と殆んど同様に一直線に歐洲に向ふ。日本海にもこんな關係があるだらうと思はれる。

次に靺鞨とは何であるか考へて見たい。之はもと住民の名で、其住民の居る土地の名にもなつたことは明である。住民でも同種のものばかりでなく、其中に雑多の分子を含んで居つたといふことも記録から想像せられる。靺鞨といふ語については、學者の説が色々ある様であるが、私も一つ説を述べて置きたい。白鳥博士は黒龍江の土名マンゴリから來たものらしいといふ説を出して居られるが、若し靺鞨とマンゴリとの間に關係、かあるとすれば、靺鞨からマンゴリといふ河の名が出て來、即ち靺鞨川といふ意味で、土人が黒龍江をマンゴリと稱へたのではあるまいか。語の形から言ふと、靺鞨は古くてマンゴリは新しい様である。

私の説を述べやう。東洋の諸民族には、國號に美名を附けたがる傾向がある様である。キプチャクでも金でも元でも清でもさうだらうと思ふ。其上にゐらさうな形容詞を附けたがる傾向もある様に思ふ。西洋でも、グレートブリテンなどは大といふ形容詞を冠して居るが、外は餘り形容詞をつけない。處が東洋になると日本は大日本、支那は中華、朝鮮は

大韓國といふ風に、ゐらさうな形容詞をつける。そこで私が考へるに、靺鞨はもと「強い」といふ意味の言葉で、Magaであつたのが靺鞨と音譯されたのではなからうか。此語は中々廣く普及して居る様で、マツヤル語では元と「高い」といふ意味を持つて居つた思ふ。現在「高い」といふ言葉は Magas で、S は名詞から形容詞を作る語尾であるから、S の附かない名詞があつたらうと思ふ。現在もあるが、「自分」といふ代名詞だけ残つて居て、「高貴」といふ意味の名詞にはなつて居らぬ。滿洲語には Mangga「強い」といふ形容詞があり、オロツコ語には Manga「甚だ」といふ言葉があり、「力強い」といふ意味にも用ゐられる。私は是等の語は凡て語源を同するもので、Maga は古い形、 M 又は M の加はつたのは新しい形であると考へて居る。即ち靺鞨人とは強勇人、靺鞨國とは強大國といふ意ではあるまいか。即ち民族名ではなく、國家組織が出來た時の國號であらう。それから音韻といふものは、母音も子音も變化は免れぬものではあるが、子音の方は變化が少く、母音が變化し易い。此點から考へて、勿吉も靺鞨も共に同一語の音譯で、時代を異にした爲めに、

異なる文字を充てたのではないかと思ふ。

扱て之から愈よ其鞅鞞人の言葉が、どうして手宮の洞穴に墓誌として残つて居るかといふことを考へて見たい。此墓は比羅夫の所謂肅慎征伐と直接の關係があるとしか思へない。勢ひ日本書紀を引かざるを得ない。齊明天皇の條に

六年……三月遣阿陪臣率船師二百艘伐肅慎國阿陪臣以陸與蝦夷令乘已船到大河側於是渡嶋蝦夷一千餘屯聚海畔向河而營々中二人進而急叫曰肅慎船師多來將殺我等之故願欲濟河而仕官矣阿陪臣遣船喚至兩個蝦夷問賊隱所與其船數兩個蝦夷便指隱所曰船二十餘艘即遣使喚而不肯來阿陪臣乃積綵帛兵鐵等於海畔而令貪嗜肅慎乃陳船師繫羽於木舉而爲旗齊棹近來停於淺處從一船裏出二老翁廻行熟視所積綵帛等物便換著單衫各提布一端乘船還去俄而老翁更來脫置換衫并置提布乘船而退阿陪臣遣數船使喚不肯來復於弊賂辨島食頃乞和遂不肯聽據已柵戰于時能登臣馬身龍爲敵被殺猶戰未倦賊被殺已妻子○五月……又阿陪引田臣獻夷五十餘

阿陪臣比羅夫は、齊明天皇の御世に三度北征に出て居る。四年には秋田能代まで行き、北海道へは渡らないで歸つて居る。五年には北海道まで行つて居る。而して本文には蝦夷國を討つとある爲めに問題が起らない。六年に三度目の北征をして居るが、之は肅慎國を討つとあり、船大河の側に到るとある爲めに、非常に學者の間の問題になつて居る。大河を石狩川とするのはまだ良いが、甚しきは之を黒龍江だとする説がある。之は歴史の材料供給者の罪でもなく、編纂官の罪でもなく、後世の學者の誤解の様である。材料供給者も編纂官も、能く了解して居つた様に思はれる。民族と國土と一致して居る日本などで起り勝ちの誤解である。今日でも伊太利人とか獨逸人とか云ふと、伊太利王國臣民、獨逸帝國臣民だと思ふ人が澤山あるので、攘國臣民たる伊太利人とか、露國臣民たる獨逸人とか言はぬと理解が出来ぬと同様に、肅慎人といへば、肅慎の地に居るものと解するから起つた誤りではないか。亞細亞でも歐羅巴でも、大陸では住んで居る多數民族の名で其土地をよぶのが一般である。トルコ人の多數に居る土地はトルコの國、ドイツ人の多數に居る土地はド

イツの國(ドイツ帝國でない)である。それで北海道でも奥羽でも、肅慎人の多數に居る土地は肅慎國、蝦夷人の多數に居る土地は蝦夷國であつて、クニといふ言葉には、もと今日の如き國家といふ様な意味がなく、單に今日のトコロといふ位に過ぎないのである。英獨語のランドといふのも同じことである。それで私は、日本書紀の肅慎國とは、報告者も編纂官も、肅慎人の居るところといふ意味で書いたもので、決して大陸の意味ではないと思ふ。第一當時の航海の速度から考へる必要がある。

比羅夫時代の船の速度はどんなものか想像がつかぬ。若し帆を用ゐたにしても、補助機關に過ぎなかつたらうといふことは前に述べて置いた。我國の古い所で船の速度の分るのは時代は大分違ふが、「土佐日記」である。十二月二十八日に土佐の浦戸を出て、二月六日「難波につきて川尻に入る」まで、三十八日かゝつて居る。而して此間はおよそ百六十五哩あるから、一日平均僅かに四哩餘に過ぎない。所が色々の障りのため漕がぬ日が多く、漕いだ日にはどれだけの速度かといふと、一日平均十五哩となる。比羅夫の船は當時の軍船

だから女子供を載せた貫之の船よりは早かつたとしても、非常の速度を想像することが出来ない。

西洋の資料によると昔の船の速度が多少分る。フェニキア、ギリシア時代の地中海の航海、ノルマン人時代の北海の航海程に、比羅夫時代の我國の航海が進んで居らなかつたかも知れぬが、参考の爲め調べて見やう。之は主としてゲッツ博士の著「世界貿易上の交通路」及びフォード博士著「中世初期に於ける北歐の航海」に據る。フェニキア船一日の速度は六十四哩が普通で、「世界貿易上の交通路」(二二七頁)、帆を用ゐると百十二哩(同書二二八頁)位出た。又黒海航海のギリシア船は、晝は三十四哩、夜は三十二哩餘の速度に過ぎなかつた(同書二四五頁)。又アテネ全盛時代に於ける各港間の船の速度が分つて居るが(同書二六〇頁)、一日の速度は哩に換算すると、六六、六八、七四、九六、八四、六八等である。それから中世初期に於ける北歐の沿岸航海では、一時間の速度が普通二哩乃至四哩、順風なれば四哩乃至六哩であつた(「中世初期に於ける北歐の航海」二八頁)。而し

て一日に十二時間以上は漕がなかつたといふから、一日の速度は普通二五漕乃至五〇漕、順風なれば五〇漕乃至七〇漕といふことになる。

以上の資料から比羅夫時代の船は、貫之の船の二倍の速度、即ち一日三十漕にはなつて居らなかつたらうと思ふ。今假りに一日三十漕の速度があつたと考へる。敦賀から船が海岸に沿うて北行し、龍飛岬から白神岬に渡りて尻別川口に至るとすると、およそ七百二十五漕ある、若し途中能登の北端から直江津邊へ直航すると、六百七十五漕に短縮し、又能登の端から佐渡の南岸に渡り、新潟邊に出るとすれば、およそ六百十五漕に短縮する。それで最短航路の能登から佐渡を経ても二十一日かゝる。但し之は毎日漕ぐとしての計算で少なくとも七日に一日位は天候の都合上休まねばならぬ日がある。また能登から佐渡、佐渡から新潟へ渡るとなると、数日間日和待ちをせねばならぬ日が多い。そこで敦賀から尻別川の口までは、最少限一月を要すると見ねばならぬ。また尻別川口から黒龍江口までは、およそ七百卅漕ある。一日三十漕漕ぎ七日に一日休むとして二十八日かゝる。一日三十漕

といふのも多過ぎ、七日に一日といふのも少過ぎるから、之も四十日はかゝると見ねばならぬ。次に津輕以北では食糧の積込が不可能であるといふことも考へねばならぬ。斯う考へると、三四月頃敦賀を出發して黒龍江で上陸し、肅慎を討て、海の氷らぬ中に歸つて來るといふことは、不可能と見ねばならぬ。小笠原子爵は「亞細亞大陸までは行かぬと思ふ」と述べて居られるが、私も同意見である。私は樺太までも行かぬと思ふ。日本書紀の記事を見ても、此邊の消息が分ると思ふ。第一回には秋田、能代まで行つたが、第二回には北海道まで行つた。私は壽都灣に着いたと思ふ。此度は航程が長いから、前年四月出發より一月早く、三月に出發して居る。能代まで行くには四月に出發したが、壽都に至るには三月に出發する程の用意周到の海軍大將は、前年と同時に出發して、黒龍江口に向ふといふ無謀なことはせぬと思ふ。それも夏冬共航海の出来る海ならば出發の時期は問題にならぬが氷結する海や港に對しては、暖い地方と考へ方を異にせねばならぬ。また五月に夷五十餘を献じたとあるから、本人も三月に出發して五月の終頃には都に歸つたのであらう。敵

地を黒龍江としては、こんな早業は現今の軍艦でも六かしいと思ふ。

それで私は、比羅夫は肅慎人の居る處へは行つたが、石狩灣より先きへは行く譯がないと思ふ。大河といふのは越前匹田生れの比羅夫の目で言うた話で、敦賀灣に注ぐ笙の川に比べると、大河は黒龍江まで行かんでも澤山ある。私は大河は尻別川であると思ふ。而して肅慎國といふのは、小樽灣に上陸した靺鞨人が、積丹半島から餘市川流域や豊沃な尻別川流域に、植民を始めて居つたのを指すと解するのが、妥當であると思ふ。それから弊路辨島が問題になつて居るから、少しく説明して置く必要がある。

私は思ふ、弊路辨も島も音譯で、弊路辨は、ポロベツ、島はシユムで、共に地名であつて島名でなさそうである。抑もアイヌは地名をよく保存し、又日本人は、何處へ行つても土人の地名をそのまま襲用し、日本語の地名を與へるといふことが極めて稀である。北海道の地名の如きも其通りで、旭川の如き日本名でも、アイヌ語地名の翻譯に過ぎぬ様な有様であるから、小地名に至りては悉くアイヌ語原のものを見ることが出来る。扱て地圖を

見ると、尻別川口の直ぐ南に島古丹といふ地名がある。も少し南へ行くと、ポロベツといふ川がポロベツ岳から流れて来るではないか。即ち此處はポロベツシマコタン地方である。此シマコタンをバチエロル氏は「石の處」と説明して居る、島ではない。此處ならば歸りて食頃に再び來ることが出来る。

渤海人並に其前身たる靺鞨人は、始終東に向つて經濟的發展を試みやうとして居つたらしい。我國へ絶えず使節を送つたのは、通商貿易の目的であつたらしく(渤海史考)、北海道に向つては植民を送つた様である。日本書紀の記事を見ても、戦争の目的はなく平和的植民を目的として居つたといふことが分る。即ち妻子や老人を連れて來て居つた。又戦はぬ中に和を乞ふとあるので、さう解釋することが出来る。然るに遂に平和解決が出來ず、日本軍と戦ひ、死傷も少しはあつたが、肅慎人には始めから戦意がないので降参するものが多く、多數は赦され、其中五十餘人だけ俘虜として都へ連れて行かれた。しかし彼等とて一生を無事に都の附近で送ることが出來たのであらう。

船から出て来た二老翁といふのは、多分二人の族長で、移民團長であり、文字もあつたものであらう。戦が終つて比羅夫は移民團と戦つたことが分り、戦死した族長をば厚く葬ることを許したから、遺骸は舟に載せて手宮に送り、横穴の中に葬つたのであらう。手宮は當時大陸との交通の要衝であつたから、將來の便宜を考へた上のものであらう。而して墓誌として

……我は部下を率ゐ大海を渡り……闘ひ……此洞穴に入りたり……と刻んだものであらう。實に齊明天皇六年、神武紀元千三百二十年(西紀六六〇年)、今大正七年を去る千二百五十八年前である。

嗚呼 肅慎の老翁よ よし汝が移民計畫は失敗に終つたにせよ、優秀民族の國に植民するのは不可能事であるを思ひ、恨む勿れ。老翁よ汝の祖國は影も形もなく消え失せ、其歴史だに朦朧たるの時に當り、汝の記事は世界の大帝國の記録に残り、又汝の墓誌も讀破せ

られたことをよろこべ。老翁よ以て冥すべし。エンデリの神は永に汝の靈を護るであらう。

大正七年二月「小樽新聞」、同年四月五月「歴史と地理」所載

三、我國に保存せられたる古代土耳其文字

明治四十五年四月、私が始めて北海道を巡歴した時、小樽手宮の洞穴内の岩に彫刻してあるアイヌ古代文字といふものを見たが、當時金石文や考古學には何等の智識のない私に取つては、猫に小判の様なものであつた。しかし此方面に興味を有する知人などには、其繪はがきを贈つて置いた。旅行を了へて考古學者などに尋ねて見ると、あれは何も意味のない落書に過ぎぬといふことであつた。又之に關しては、鳥居龍藏氏の説が「歴史地理」の大正二年十月號に「北海道手宮の彫刻文字に就て」といふ題で出て居る。此講演筆記には、此彫刻に關する記事や、内外諸學者の説が詳細に載つて居るから、最も参考になると思ふ。其上鳥居氏は、歴史上の考證までされて居る。而して同氏の卓見とも稱すべきこと

三、我國に保存せられたる古代土耳其文字

は、此文字を古突厥文字であると断定され、尙ほ其上に、

其文字で現はした發音—言葉は突厥語であるか、又は肅慎語(靺鞨語)であるか、之は疑問であります。私は寧ろ後者即ちツングース語であらうと考へられます。

憾に堪ぬない。同氏は功を一簣に缺いたもの、様である。さりながら、外國の學者が未だ之を讀破して呉れなかつたことは、我が學界の爲めに誠に幸福である。我が國の研究をば我が國人に委す爲めに、天が甘く配劑して呉れたこと、感謝に堪ぬない。

近ごろ畏友山下(寅次)文學士にラドロフ氏著「蒙古に於ける古代土耳其文碑銘」を借りて一讀すると、其文字が先年手宮で見た所謂古代アイヌ文字に類似して居る様に思はれた。早速比較をして見ることにした。口繪には手宮の彫刻文字と蒙古の古代土耳其文碑銘を一つ出してある。

此彫刻した文字なるもの、右半分が、繪はがきに現はれて居るのを能く見ると、右端に

ある繪の磨滅した様なものを除けば、上下に長い明瞭な模様が三行ある。鳥居氏は横に書いてあると言はれるが、私は縦に書いてあるとしか思へぬ。そして中の行と左の行との間にYとXと二つの文字が挟まつて居る。此等の模様の特色とも見るべきことは、どの模様も縦の線に對してシンメトリーをなして居ることである。上下に長いから上から下へ讀むものとの想像もつく。私が此彫刻が古代土耳其文字に似て居ることに氣の付いたのは、主としてDとYと々々だからである。而して古代土耳其文字を見ると、此三字が悉くある。但し横と縦との違ひがある。そこで私は色々の假定をして見たが、結局シンメトリーを保つ爲めに、或文字は横に書いたのであるといふ推定をした。即ち古代土耳其文字のY々Dヨは、縦線に對してシンメトリーを爲して居らぬから、此等の文字は横に書かれてへ々Dヨとなつて居るものと見た。此推定は間違はなかつたのである。古代土耳其文字は横にも縦にも書いてあるのである。そうすると

右の行 泉X Y

は D Y へ X Y

JRODR

三、我國に保存せられたる古代土耳其文字

中の行 $\gamma \gamma \gamma \gamma \gamma$ は $\gamma \gamma \gamma \gamma \gamma$ SRRB
 左の行 ㄨ は ㄨ DOC

となる。それから中の行と左の行との間にある γ は γ (R) で、 γ は γ (J) を横に書いたものと讀まれる。この書換(トランスクリプション)はラドロフ氏に據る。

此様に考へれば、手宮洞穴内の彫刻が古代土耳其文字の應用であるといふことには、誰も異議があるまいと思ふ。然らば之で現はされた言語は果して何語であらうか。言語も古代土耳其語であるか、それとも他の國語を古代土耳其文字で書いたものであらうか。此疑問は鳥居氏も起されたが、之は誠に判断に苦しむので、學者の垂教を仰ぎたいと思ふ。私が廣島に居りて参考し得る書物は、山下文學士所藏のラドロフ氏の著書以外は誠に貧弱なもので、是等を参考したゞけでは、此彫刻文が土耳其語であるといふ斷定が出来ない。

然らば北海道の對岸には昔からトングース人が居るから、トングース語を古代土耳其文字で書いたものではあるまいか。

滿洲語には右彫刻文に似た言葉がないかと探して見ると、無いこともないが、グルーベ著「ゴルデ語集」に據ると、尙ほ一層明瞭なものがある。即ち

Jera—Jeragu—, 率ゐる、導く。

doro (namu) 大海。

Sori—, 争ふ、闘ふ。

M. sorte. O. sorte

(M. は γ キシモ井ツ氏に據るゴルデ語。O. は同氏に據るオルチャ語)

以上はグルーベ氏に據る。

dosi—mbi 入る。

以上はアルレー氏著「滿洲語文典」に據る。

此等の資料から彫刻文を書換へると

Jero doro (namu) 率ゐ、大海。

三、我國に保存せられたる古代土耳其文字

Sorribi

我は闘ひ。

doei

入りたり。

となる。今磨滅した文字を想像して見ると、大様次の様な意味を彫刻したものではあるまいか。

……我は部下をひきゐ、おほうみを渡り……たたかひ……此洞穴にいりたり……

然らば此言葉は何語であるか。先に私が言うた通り満洲語に似ないこともないが、それよりも『ゴルデ語集』の語に能く似て居る。しかしオロツコ語までは達して居らぬ。オロツコ語では、大海は *doroje namu* (オロツコ文典) である。又 *sorribi* の *ri* は、どうも單數一人稱の動詞の語尾らしく思はれ、従つて此言語は東トングース語に屬する様に思はれる(オロツコ文典)。次に *doei* は満洲語の *doi* と同意義らしく思はれる。オロツコ語には *do* (内)といふ名詞があり、*dodu* とすれば副詞となり、是亦同じ語源の言葉らしく思はれ

る。そして彫刻文には過去動詞となつて居る。どうして夫れが分るかと言ふと、此動詞はオロツコ語の *timbi* 動詞に當るもので、オロツコ語では之から人稱語尾を取去ると *bi* が残る。此人稱語尾を略した過去の形が、『オロツコ文典』中の「オロツコ譯桃太郎の話」の中に澤山出て居る。一二の例を示せば、

……*döptö buddöli kaltaligatti*.

(オロツコ文)

……食べようと思つて二つに割つた。

(日本文)

Mabätya ya mamätya ya pötö lö ana bimuli, mangäji agdäti.

(オロツコ文)

ぢいさんとばあさんは子供がなかつたから大層よろこんだ。

(日本文)

彫刻文の *bi* はオロツコ語の *bi* に相當すると思はれるから *bi* で終る動詞は過去かと思ふ。

右の如く満洲語よりはオロツコ語に近いが、オロツコ語とも少し違ふ。其處で私は満洲語とオロツコ語との中間に位するが、東トングース語に屬するもので、烏蘇里地方の住民の言葉であると思ふ。私は之を鞆鞆語と名づけたい。即ち手宮洞穴の彫刻は、古代土耳其

文字を應用して書いた棘鞆語の文章であると私は信ずるのである。
又右端の様は、文字の様な部分もあるが、繪の様でもある。之は尙ほ研究の餘地があると思ふ。

私は茲に謎の如き短文を草した。若し之が多少なりとも學界に貢献する處があらば仕合と思ふ。終りに臨み山下文學士の御助力に對して深謝の意を表する。

大正七年二月「尙古」所載

小樽の古代文字 終

大正八年三月七日印刷
大正八年三月十日發行

定價 金貳拾錢
(郵稅貳錢)

著作者
發行者

中

目

覺

廣島市吉島町三四七

印刷所

增田兄弟活版所

廣島市搦屋町一二

不許複製

廣島高等師範學校内

發行所 地理歴史學會

播磨口座大阪三七九八二番

.8.5.22

323

299

終

